

大田直子さんに関する思い出のかずかず

—その父上、その母上、そして直子さん—

浪本勝年

(立正大学)

大田直子さんの急逝が報じられて強い驚きと深い悲しみに陥っているのは、多くの本学会の会員各位と同様である。逝去の報を知らされてから、改めて大田直子さんに関することについて振り返ってみると、思いのほかいろいろな「長い歴史」を有するを感じている現在の私である。

1 父君・大田捷（さとし）先生のこと

大田捷先生（当時、工学院大学助教授）は1965年、東京大学教育学部の非常勤講師として「地方財政論」（この科目の名称は正確性を欠くか？）を担当されていた。

ある日の講義後、たまたま先生にさそわれ、私は赤門前の喫茶店に行った。そのときの先生私に対するやや乱暴な口調でおっしゃった次のような一言は、今でも忘れられない。

「地方財政白書というのがあるが、知っているか。教育学部の図書室になかったら（購入し）いれておけ。」

わたしが、その直後、教育学部図書室に向かったのは、言うまでもないことである。

それから6年後の1971年7月30日、誰もが予想だにしなかった悲劇が先生を襲ったのである。全日空機隼石衝突事故である。

8月のある暑い日、しめやかに先生の葬儀が行われた。そのとき、わたしは、かわいらしい中学生の少女を家族の中にみついていた。それが大田直子さんであったのだ。

大田捷教授急逝（その日をもって工学院大学は「教授」への昇格措置をとった）の後、工学院大学は、教育学関連の授業の非常勤講師を求めることとなり、私もその一員に選ばれた。1972年以来、今日まで約40年にわたって私は非常勤講師を続けている。

2 母君からの忘れられぬ丁寧な感謝の言葉

大田直子さんは、10年ほど前、ロンドンに留学することになり、宿泊先の紹介を私に頼んできたのである。1995年度、1年間小生の滞在したFlatを紹介したところ、彼女はそこで過ごすこととなった。

ある日、直子さんに連絡しようと自宅に電話をかけたところ、偶然、お母さまが電話口に出

られたのである。私に対し、「いつも、いつも直子は、先生にお世話になっています。今回もロンドンの宿泊先を紹介してくださり、深く感謝しています」との実に丁寧で心のこもったお礼の言葉を約30分にわたって語られたのである（このことは、全くの想定外のことであった）。大田捷先生とはあまりにも対照的であったので、印象深く覚えている。

その後、直子さんに会った際、お母さまのことをお話した後、彼女に向かって「直子さんは、お父さん似だなあ」と率直に伝えたのであった。

3 大田直子さんのこと

大田直子さんと私とは、一回り以上年齢が離れている。そのせいであろうか、学生時代の彼女についての記憶はない。いつ初めてお会いすることになったのか、思い出せない。

イギリスで、あるいは本学会の席上であろうか。

小生、この20年近く、毎年のようにイギリスの学会に出かけているが、そこで、たびたびイギリスの研究者を囲んで直子さんと話し合うこととなったのである。日本よりも英国で彼女と出会う方が多かったようにも記憶している。

いつぞや10年近く前のことであろうか、ロンドン滞在中、コンピューターの接続操作に悩んでいた私に対し、彼女はわざわざホテルの私の部屋に来て、親切に助言をしてくれたことを感謝の念をもって思い出す。

2004年の英・教育史学会（HES）はDublinで開催された。私は発表を終えてホッとしていた日の夜、Trinity大学において開催された同学会のReceptionに妻とともに参加した。そのとき米国の研究者とすでに懇談していた彼女が席を求めていた私たちを見つけ、「先生！先生！ここへどうぞ」と声をかけられた。このときは、対面して長時間いろいろと話し合うこともできた（2004年11月20日。写真はこの席上、私が撮影したものである）。



大田直子さんは、得意の英語を駆使しながら、表情豊かに英国で活発な外交を展開していた。おとなしい大和撫子のイメージを払拭する勢いがあった。

このような澆刺とした大田さんの姿を目にしたある著名なイギリスの研究者が、私に尋ねたことがある。

「Naokoは、日本の典型的な女性であるといっってよいのか」と。

私がどう答えたかは会員各位の推測に任せよう。

謹んで大田直子さんのご冥福をお祈りしています。